

うわべだけみた  
新中国「走馬看花」旅行記

かわむらよしお  
川村嘉夫

はじめに

いわゆる「竹のカーテン」なるものが、だれによって、どのようにおろされたのか、ここでは問わないことにしよう。ただ、それは15年の歳月につれてだいぶほころびがきているものの、あいかわらずわれわれと中国とを遠くへだてている。

いまのところ中国へ旅行する通常のコースは、香港から深圳にはいるのがもっとも便利である。わたくしはこの2年間、いわば中国への門先で生活してきたわけだ。ところでこの香港の国境近くに「勸馬洲」という小高い丘がある。なにしろ九竜から深圳に通じる汽車に乗っても国境駅の一つ手前で下車させられるし、国境近くを徘徊してはめんどうなしだになるから、中華人民共和国を一瞥してみたいむきには、この丘がかっこうの場所となる。最近ではあずまや風の展望台までできて、香港観光には欠かせぬコースとなった。だが、ここからは香港側とは別にかわりばえせぬ華南特有の田園風景が望まれるだけであるから、さらに接近して中国をのぞきみたいむきには、香港から水中翼船で1時間のポルトガル領マカオに行くといよい。ただしここでもまともに国境開門に行くと500メートルぐらい手前でさえぎられ、双眼鏡やカメラなどのぞかせようものならお巡りさんがあわててとんでくる。しかしうまくしたもので近くの国境ぞいに難民街があり、その共同便所がまさに中国をへだてる小さな川のふちに立っているのです、ここにもぐりこめば、目と鼻の先に寂然とたたずんでいる中国人民解放軍の兵士をみる事ができる。中国を研究するわが現地派遣員も、従来このような形でしか研究対象を観察することができないでいたわけである。

だが、7億のすぐれた民族と膨大な物的潜在力をもつ中国を無視することは、どだい無理というものである。日中間の人的交流も近年ますますさかんとなって、たとえば1963年にわが国から中国に渡航した人数は1715名、1964年は1844名(実際はもっと多い)、1961~62年平均の600名と比べて3倍という増加ぶりである。この事情は

アメリカを除く諸外国についても同様だろう。香港大学の同学のフランス人やオーストラリア人など、時々顔を見ないと、中国へ観光旅行にいつか来たというしだいである。わたくしも、研究所と知人たちの援助をえて、中国国際旅行社と半年におよぶ交渉をしたあと、本年2月末に中国旅行を実現することができた。期間はわずか13日間、訪問地も北京、上海、広州の3都市だけ、まったくの「走馬看花」(馬に乗ってさあーとうわつつらだけ眺める)だけだったが、少年時代を東北中国ですごしたことのあるものとして、まことに感無量の、意義ある旅行だった。

これまで中国渡航は、商社員を除いては、中国側の人民外交学会とか対外文化協会とかの招待をうけるか、運よく中国国際旅行社のあっせんをうけるかしなければ不可能だった。しかし本年4月以降、日本の旅行社とこの国際旅行社との間に協定が結ばれ、一般人も比較的自由に旅行できるようになった。多くの人が、中国の社会主義建設の状況にまのあたりふれることができるようになったのは喜ばしい。いささか稀少価値がうすれてしまったが、つぎにわたしの中国旅行を報告する。

I 主要都市の印象

香港中国旅行社で、簡単な1枚の中国入境簽證(ビザ)と国境駅までの乗車券を手にして、これでやっと中国旅行実現かという思いがこみあげる。荷物は冬服をつめたトランクとバッグ一つ。2月26日朝8時30分九竜駅から「広九鐵路」にのる。香港側の国境駅羅湖での出国手続きはいいかげんなもので、旅行社の案内人がパスポートをあげかかってすませてしまう。深圳川にかかる例の小さな鉄橋をわたると、中国の入国審査官が3人、ソ連軍式の服装で立っていてパスポートを検査する。解放軍兵士も黙然と直立しているのがみられ、やはりここは中国が自由世界に開くただ一つの門戸なのだという感がする。

荷物検査はきわめて丁寧、簡単、ただしカメラ、ラジオ、時計、外貨の所持額は正確に申告しなくてはならない。日本の商社員が、精密機器の見本などをかなり神経質に調べられていた。フィルム本数の制限はない。撮影も、空港と機上のほかはまったく自由である。あとでの経験だが未現像フィルムの持出禁止も事実上なくなっていた。深圳駅のりっぱな休息室でお茶や昼食の接待をうける。「鼓足干劲、力争上游、多快好省地建設社会主义」(大いに意気こんで、高い目標をめざし、多く、早く、りっぱに、むだなく、社会主義を建設しよう)、「鞏固国

防、保衛祖国」などのスローガン、ポスターが目につく。

12時30分、急行列車で広州に向かう。われわれ「外賓」(外国からの賓客)は一つの車両にまとまる。同乗者は革新政党的の要人らしい日本人、西ドイツの婦人、パキスタン人、ペルー人、それに香港在住の華商たちである。話に聞いていたとおり、各車両には必ず「列車員」という少女が1人ついていて、たえずお茶やおしぼりのサービス、車内の掃除をする。この活発な少女はわたくしのぱっとせぬ身なりをみて、「這位同志也是外賓嗎?」(この方も外国のお客さん?)と旅行社の案内者にたずねていた。ビニール袋に入れたリンゴなども売って歩いて、華商たちに「どうも少し高いようだ」とひやかされていた。あとで検札にきた「列車長」も女性であった。窓外はのどかな水牛耕作の田園風景がつづく。ただ新しくできた灌漑用の揚水ステーションや水路がめだつ。川にかかる鉄橋に必ず解放軍兵士がみはっているのは、やはり広東省が外界からの破壊活動をもっとも多くうけているせいなのだろう。

### 1. 広州

夕刻4時広州着、女性の服務員に迎えられて羊城賓館へ、新しい洋風のホテルである。外国からの旅行者、それも海外華僑の観光団でいっぱいである。目ぬき通りにでて新華書店や古本屋をのぞく。あでやかな香港からくると、広州はうすぐらい感じの町だ。しかしあの裏通りにみられる不潔さはまったくない。子供たちはよくはだして遊んでいる。広東人はあたたかい土地柄もあって昔から身なりはあまりかまわぬという。広州で見学したのは中山大学、農民運動講習所、烈士陵园などである。

「中山大学」は1924年、孫文によって創立された由緒ある大学で、いまは自然科学系の総合大学となっている。学生4350人、教職員約1500人、学生の男女比は6対1という。ちょうど昼食時で、学生たちがアルミ食器にいっぱい盛りしてパクついているふぜいは、われわれの大学の寄宿舎と大差はない。

「毛沢東農民運動講習所」は第1次国共合作期の1924～26年に、農民運動の指導幹部を養成する目的でつくられたもので、毛沢東が一時所長になったことがある。蕭楚女、瞿秋白、鄧中夏、惲代英、彭湃、周恩来、郭沫若、何香凝、林伯渠、李立三などのそうそうたる領袖がここで講義した。毛沢東の使用したという粗末なベッドが昔のまま復元しておいてある。初期農民運動の貴重な資料も多い。

「広州蜂起烈士陵园」は、広東コンミュンの犠牲者

たちを記念する公園である。1927年、蔣介石の4月12日クーデターのあと中国各地に革命と反革命の激しい拮抗があいついだが、12月に広州で最初の労働民主政府が成立した。しかし内外反動勢力の圧力でこれも短時日のうちにおしつぶされ、多くの人がこの地で虐殺されたのである。いまは広州市民のためのりっぱな公園にかわっている。

### 2. 北京

2月27日夜7時30分、広州の白雲空港からイギリス製パイカントで北京に向かう。食事やお茶、チューインガムのサービスぶりは外国の航空会社とかわりないし、乗客もヨーロッパの観光客が多いから、どうも人民中国の上を飛んでいるという気がしない。10時に杭州着、40分休息のあと北京の首都空港についたのは真夜中の1時すぎであったが、旅行社の服務員が出迎えている。両側がみごとに植樹された道を1時間ほど車でとばし新僑飯店へ。華南のうっとりしい天候にひきかえて、ぴんと乾燥した夜空に星がうつくしい。

翌朝、中国国際旅行社総社の日本科長がわざわざホテルまできて歓迎の意を表し、懇切に参観希望などをたずねてくれる。ここではじめて中国での全旅程が確定し、これに要する総費用を総社に一括払いすることになる。その内訳は、総合服務費として1日85元(1元=150円)を12日分、計1020元、交通費として広州—深圳の往復汽車賃および広州—北京—上海—広州の航空賃366元、合計1386元である。この総合服務費には、宿泊費、食費、服務員費(通訳、案内)、乗用車費、電報電話等連絡費、諸手続き費などのいっさいが含まれる。これは特等B級の待遇ということで、団体になればもっと割安となる。だから旅行中は、おみやげでも買う費用のほか1銭も使う必要はない。またわたくし1人のために案内者、運転手と乗用車がいつも用意されているわけである。食事は食べ放題、ビールは飲み放題である。しかしいくら中国料理が好物でも、朝からこっそりしたやつでは見ただけで腹いっぱいになる。「日本の方は少食なので、西欧のお客さんと比べて採算が合いますよ」と服務員が笑っていた。この新僑飯店には日本の商社員や新聞社の特派員がたくさん滞在していて、食堂やバーはほとんどこの人たちで占められ、さながら「日僑飯店」の観がある。

旅行社に「観光コースはけっこうですから、人民公社や工場をできるだけみせてほしい」と要望したのだが、すぐにはなかなか手配ができないらしく、北京での日程はやはりもっぱら名所旧跡めぐりということになる。故

宮（紫禁城）、頤和園（万寿山、昆明湖）、明十三陵、さては遠く八達嶺の万里長城まで案内されたほか、北海公園、天壇公園、天橋、王府井、老舎の戯曲で有名な竜鬚溝などは1人でぶらぶら歩きしてみる。万里長城では身を切るような朔風にふるえあがって、デカンショ節の1節を思いだすゆとりもなかった。

北京城内はいかかわらず灰色、平屋建の家並で、大街（大通り）から胡同（横町）にはいると、主婦たちが立話をしていたり、まだ纏足のおばあさんがみられたり、まるで少年時代の旧満州での生活に逆もどりした錯覚にとらわれた。だが、人びとの身なりと路上はあくまでも清潔である。こうした城内から一步郊外へでると、西は文教地区、東は工業地区と巨大な建築物がぞくぞくとたっている。消費都市であった北京も、「上海に学び、上海に追いつけ」のかけ声で、工業都市へ脱皮しつつあるようだ。おもな交通手段は国産のバスかトロリーバスでこれが間断なく走っている。「租」と書いたハイヤーも時たまみかけるが、乗用車のほとんどは外交ナンバーかわれわれ外賓の接待用である。何といっても自転車が多く、輪タクもまだみうけられる。北京滞在中、人民大会堂では日韓会談の反対集会、天安門前ではパキスタン大統領の歓迎大集會が行なわれ、国際情勢を敏感に反映する革命中国首都の面目をみせてくれた。北京で見学したのは、北京図書館、中国人民大学、四季青人民公社（以上後述）、中国革命博物館・歴史博物館などである。これで昼の日程はいっぱいとなり、夜は昆劇「奇襲白虎団」（白虎連隊を奇襲する）をみたり、王府井の百貨大樓（デパート）や東安市場内の古本屋をひやかしたりした。

ここで中国の書店についてふれると、北京、上海、広州とも、だいたい新華書店の近くに公私合営の古本屋がまとまってある。これらはさらに、定期刊行物、解放前のもの、解放後のものの各専門店にわかれる。しかし社会科学関係ではめぼしいものはあまりない。それでも商業ベースで輸出不能のものがあって70冊ほど購入し、税関検査のあと日本へ小包郵送したが無事ついていた。一部は携帯して、出国のさい深圳の税関で綿密な検査をうけたが、これも全冊問題はなかった。ただ各地で買った『南方日報』『羊城晚報』『北京日報』『北京晚報』『解放日報』『新民晚報』などの地方新聞はいずれも持出しできなかった。いずれにしても印刷物の移出はかなり緩和されているとみてよい。

### 3. 上海

3月5日朝8時20分、首都空港から上海に向かう。双

発15人乗りのソ連機で、2000～3000メートルの高度を飛ぶのだが、ひどく寒くて毛布にくるまってふるえる。それでもホステスが休むまもなくお茶や果物のサービスをする。同乗者はポーランドの技術者2人と案内者のほかは内蒙古からの労働者代表らしい。隣の「老同志」はチチハルからきたとのことで、小学1年生のころ同地に住んだことのあるわたくしは何ともなつかしかったが、かれらの胸にやきついている過去の事柄を思うと、昔話をきりだせなかった。上海で先進工作者会議にでも参加するのだろう。黄河と揚子江の2大河川を横ぎり、河北の大きく区画された畑地と集居部落から、江南の小さく区分された水田と散居部落まで、刻々と移りかわる眼下のながめは、まことに中国の広大さを覚えさせる。途中済南で休息、合肥で昼食のあと夕刻4時近く上海の竜華空港につく。

旧フランス租界から旧共同租界にはいり、黄浦江のほとり外灘（旧バンド）にでると、まるでシンガポールか香港に身をおいた錯覚にとらわれる。わたくしは上海の発展史をほとんど知らない。だが、ガーデン・ブリッジぎわの壮大な旧ブロードウェイ・マンションのトップに立ってみると、わが国も含めた外国資本主義の激流が、この決壊口からとうとうと中国内陸へ侵入していったさまがいかにもしのばれる。この激流に抗して、『赤いパレード』や『子夜』（真夜中）にえがかれた中国労働者や民族資本家の苦闘があり、堀田善衛の記録した暗黒時代を経て、上海は中国人自身のものとなった。旧サッスーン・ハウスと中国銀行ビルの立ち並ぶ前で、少年先鋒隊（ピオニール）の子供たちが何やら先生の話の聞いている。「むかし中国の民族資本家たちがこの中国銀行ビルを建てようとしたとき、計画はこれより高かった。しかし隣のサッスーン財閥から横やりがはいって、やむをえずサッスーン・ハウスより少し低めに建てかえねばなりません。かつてわれわれは自分自身の国土内でも自由はなかったのです。」この挿話にみちたサッスーン・ハウス内の豪壮なキャセイ・ホテルが、いまでは和平賓館として外賓専用のホテルにかわっている。ぜいをつくした広い部屋にぼつんといると、東方の貧書生はかえって落ち着かない。食堂は指定席になっていて、サービスも西欧風であかぬけている。さしみや天ぷら、みそ汁までだされたのには驚いた。1963年に上海で日本工業展覧会が開かれたとき、団員についてきた日本の板前から習ったのだという。

銀座通りともいべき南京路は、普通の日でも午後か

らはたいへんな人出で、真中を乗用車でぬけるのも容易でない。大新、新新、永安、先施といった昔なつかしい4大デパートも、国営や公私合営の百貨公司としてあいかわらずにぎわっている。消費物資も色とりどりで豊富だが、香港の国貨公司（国産品デパート）の同一商品と比べて価格は倍以上である。ただ外国人は「友誼商店」にいれば、国外価格と同一で購入できる。食料品部は品数も多きたいへんな混雑ぶりである。夕方小さな料理屋にはいってみると、糧券（食券）はあるかという。外国からきたというと別に何ともいわない。これは例の自然災害のときから制度化したという。上海で見学したのは上海市工業展覧会、曹楊新村、信誼化学製薬工場、七一農業機械工場、塘湾人民公社（以上後述）、少年文化宮、大世界などである。夜は越劇「江姐」（小説『紅岩』から、「江ねえさん」）をみたり、福州路の古本屋をのぞいたりした。工業都市上海の面貌についてはあとであらためてふれたい。

3月9日、朝8時30分、やはり20人乗りのソ連機で広州へ。杭州で一休み、南昌で昼食のあと2時30分広州着。華北平原は白々と冬にとざされていたが、華南は日もうらかに田植が始まっていた。中国旅行最後の夜は、広州文化公園で、人民解放軍戦士芸術団の雑技（曲芸）をみる。

香港に帰る汽車の中で、戦前の中国を少しでも知る者として、やはりこの旅行でうけとめた印象を、昔の中国と対比して考えざるをえなかった。1937年ごろ、わたくしの一家は東北中国のチチハルに住んでいたのだが、ある日郊外へハイキングにでかけたことがある。昼食をひろげてくつろいでいると、中国の子供たちがむらがり集まって、わたくしどもが食べかすを投げあたえるとわれがちに奪いあつたものである。かれらの羨望、卑屈、敵意の交錯した視線は、まだ幼かったわたくしの心に強烈にやきついて、いまだに忘れることがない。中国人は長い屈辱と闘争とを集積して、だれからもはずかしめられることのない国をつくり上げた。そして自然災害とソ連援助の引揚げによって受けた経済困難の試練を、自力で克服した。中国人はわれわれのように気おったりしない。相かわらず謙虚である。だが、いまかれらは静かな物腰のうちに満々たる自信を秘めている。新中国を訪れて、かれらのめざす社会主義国家建設の成功を疑う者はほとんどあるまい。

## II 中国の大学

中国の高等教育の発展はめざましいといえる。解放前

と比べ、1963年には大学・高専数は2倍、学生数は6倍に増加しており、とくに理工学科と教育学科の充実しているのがめだつ。北京西郊の畑の中に、ゆったりと敷地をとって北京大学、清華大学、農学院、中央民族学院などの大きな校舎が散在して文教地区を形成しているのは壯観である。この旅行で、大学では広州の中山大学と北京の中国人民大学とを訪問した。前者は自然科学系の大学なので、ここではおもに後者を紹介しよう。

これは中国のもっとも代表的な大学で、北京大学と清華大学とがそれぞれ人文科学系と自然科学系の大学であるのに対して、社会科学系の大学である。創立は1950年8月で、直接には解放前の革命大学を基礎としているが、その沿革は遠く延安時代の抗日軍政大学や陝北公学などにさかのぼることができる。だから開学のころは他の大学とちがって、労働者農民の上級幹部を養成する目的から、入学資格も革命歴や思想水準の高いことが要求されていたようだ。いまはこの伝統をうけつぎながら、社会科学系のもっとも水準の高い大学の地位を占めている。

学部は、哲学、国際政治、歴史、政治経済、法律、新聞、歴史檔案（文献学）、言語学、工業経済、農業経済、計画統計、財政貿易の12に分かれており、学生は本科（学部）約2700名、進修科約30名、研究科約30名、教授陣は約900名、その他労働者職員約1200名を有する。本科の修業年限は5年、進修科というのは、すでに大学や政府機関で働いている教員と幹部があらためて高度の専門科目を修得するためのコースで1～2年、研究科は日本の大学院に相当するとみてよい。講義内容は各学部一様でないが、ここでは政治経済学部の例をあげよう。課目は大きく3分類される。

- 1類 政治理論＝哲学、中国共産党史、政治経済学
- 2類 基礎文化（基礎科目）＝外国語および一般教養
- 3類 専門（専門科目）＝政治経済の基本知識、マルクス・レーニン・毛沢東の経済学方法論、工業経済、農業経済、財政、計画統計、政治経済学説史、各国国民経済史等。

1、2類は必修科目、3類はだいたい選択科目になっている。時間数の比率をみると、政治理論20%、基礎科目20～25%、専門科目55～60%ということである。

興味をひいたのは、いわゆる詰込み教育ではなくて、講義時間が少ないわりに自習時間がたっぷりあることである。講義は50分授業で1週間12～16時間程度、基本的な理論と事項とを教えるのみであとは個人またはグルー

プでの自習、討論にまかせ、問題や意見の相違があれば指導するという方法をとっている。教室や図書室で黙々と読書している学生の多いのもうなずける。毎日、講義・自習8時間、体育1時間という配分だから、文芸活動や娯楽のゆとりもある。

こうした自力による学習態度とあわせて特徴的なことは、かれらの理論修得が社会的な実践活動と密接に結合してなされていることだろう。教育の方針も「教育為無産階級政治服務、教育与生産労働相結合」（教育はプロレタリアートの政治に奉仕し、生産労働と結合する）ということである。だから学生たちは、年間1～2カ月も工場や農村にいて生産労働に参加する。そしてそれは労働者や農民と、まったく同じ生活条件のもとでなされる。この方法を「三同」つまり「同吃、同住、同労働」（同じように食べ、住み、労働する）という。この過程で、かれらは労働者農民の生活感情を学びとり、労働に関する知識を深め、また革命的な思想をきたえることができるわけである。これは同時に、ふだんの学習成果を活用する絶好の機会でもあるわけで、かれらの手になる各種の貴重な社会調査報告がこれまで発表されている。なおこのような集中的な労働参加のほか、毎週一定日に自主的に「公益労働」（街路や公園の掃除など）をするそう。中山大学では前者を「集中労働」、後者を「分散労働」と称して、文科の学生のほうが理科の学生より若干労働参加が多いらしく、学科と労働の比率は、理科が88対12、文科が84対16だという。そして、中国の大学生は国家の必要によって募集されているわけだから、卒業後の就職も計画的に配分される。たとえば農業経済学部の卒業生は、主として中央の農業部や地方の農業庁・農業局、人民公社、国営農場、あるいは大学で働くことになって、ただちに学生時代の学習成果を活用することになる。

つぎに学生の生活状況をみよう。よくいわれているように寄宿料、医療費は全部無料、教科書もタダで配布される。学生のほとんど（80%）が奨学資金月額19.50元程度を受けており、進修科生は前の職場で受けていた賃金の65～95%を、研究生は一律に42元を支給される。食費は1カ月15元もあればたっぷりというから、食・住には心配ないわけだ。付属図書館をのぞいてみると、利用度の高いものは何冊も用意してあって、とくに参考書を買う要もないらしい。服装はまだ粗末な紺の木綿服で一般の労働者とは見わけがつかない。

### III 北京図書館訪問

北京図書館は、日本でいえば国立国会図書館にあたり、中央政府文化部（文部省）の管轄下におかれている。その歴史は1910年に開設された京師図書館にさかのぼることができるが、解放前には長衫（長い上衣）や背広をきた一部の高級知識人しか入館できなかったという。現在では18歳以上の公民ならだれでも利用できる。しかし中央図書館としての性格から、普通の公共図書館とは違った特別の地位を占めていることはいうまでもない。一般の北京市民は、むしろ北京市文化局の指導下にある首都図書館をはじめ、市内8区、近郊9県に一つずつある公共図書館を利用するようだ。ここの図書館活動の任務も「階級、生産、科学実験」に奉仕する、つまり社会主義建設という国家的要請に直接こたえることを目的としているのが特徴的である。だからサービスの対象もおおざと科学研究者に重点がおかれ、利用者も政府機関幹部、科学技術者、大学の研究者が多い。館外貸出など、個人の場合は科学技術者に限られる、というのはその事情を示している。それはつぎのように閲覧室の種類や定員数をみてもよくわかる。

科学研究技術人員閲覧室	200
普通閲覧室	100
季刊雑誌（定期刊行物）閲覧室	100
顕微鏡巻（マイクロ）試写室	4～5
珍貴（古本）閲覧室	40～50

開館時間は朝8時30分から夜の9時まで、1日平均800人以上の利用者があるという。

図書館員はおよそ400人、別に司書制度はなく、北京大学や武漢大学の図書館学科出身者のほか、語学や各分野の専門家が働いている。その構成・組織はつぎのとおりである。

辦公室（事務）、探訪部（調査・収集）、編目部（目録編成）、閲覧部、参考部、善本特蔵部、図書館学研究部、図書・季刊交換組

蔵書数をみると、1949年には140万冊であったのが1964年末には700万冊に増加している。このうち200万冊が古い刻本であり、またおよそ200万冊が外国語図書である。古い希覓書としては、紀元5世紀ごろの敦煌の経巻、南宋の皇家図書館のもの、明朝の永樂大典、清朝の四庫全書などが自慢の所蔵であるらしい。図書収集の方針としては、目前の国家建設にもっとも必要なものを購入するということだが、歴史的文献など民族遺産の収集保存に

も力をいれているのはいうまでもない。また国内の出版社は、刊行のさい義務的に3部北京図書館に納本することになっているから、解放後に出版された国内書はすべてここに所蔵されているわけである。

外国との資料交流もさかんなようで、120の国家および地域、3000の単位機関と交換を行なっているとのことだ。日本の国会図書館、東洋文庫はいうまでもなく、アジア経済研究所もこの中に含まれる。しかし、相手が社会主義国もしくは中国との友好国とそうでない国とでは交流の原則は同じでない。前者には必要に応じて無条件に送るが、後者とはあくまで互惠平等のためで、1冊対1冊、ときには1ページ対1ページという交換もあるという。

図書目録は、やはり「書名字順目録」「著者の姓名字順目録」「分類目録」の三つがある。分類目録はつぎのような細目にわけられる。(1)マルクス・レーニン主義の古典とその研究書、(2)政府の政策文献、(3)一般書、(4)参考書。「農業」についてはつぎのように分類されていた。(1)農村・農業経済、政策、(2)土地経済、政策、(3)農村集体化、人民公社、(4)国营農場、高級農業合作社、(5)初級農業合作社、(6)互助組、農業金融・信貸・貿易・儲運、(7)糧食、増産問題、(8)各種農業産品調査、生産情況。

なお全国総合目録はまだなく、図書館相互貸出もあまり普及していないようだ。

#### IV 工業基地——上海

##### 1. 上海市工業展覧会

上海は中国随一の大会都である。と同時に大工業都市でもある。もちろん上海は、解放前から工業の中心地であったが、当時は軽工業とくに紡織業が主であった。しかもよくいわれるように、外国資本主義の侵略と国民党官僚資本主義の二重の圧迫をうけて発展はつねに阻害された。いま上海の周辺にはぞくぞくと工業団地や労働者街が建設されつつあり、重工業都市に面目を一新しているようである。この発展の経過は上海市工業展覧会に行ってみるとよく理解される。

これは市の中心にある中ソ友好館に常設されているもので、上海地区で生産された工作機械、農業機械、重・軽電気機械、医療機械、紡織製品、手工業製品、民芸品などが、大量に、配置よく展示してある。中国工業が誇りとする江南造船所製の1万2000トンの自由鍛造水圧プレスは、その模型だけがかざられてある。上海では乗用車やトラクターは、生産されていないと想像していたが

(長春や洛陽が中心)、鳳凰牌というしゃれた乗用車もあった。上海自動車工場製で、90馬力、6汽筒、最高速度130キロ、1959年試作、64年から量産体制にはいったという。この車は、日本のトヨペット・クラウンやチェコの車に伍して、町でもよくみかけた。トラクターも、7馬力のハンド・トラクターや、35馬力の大型トラクター（豊収牌）も生産されている。1949年以降の工業生産の統計的な推移は残念ながら聞けなかったが、1963年の前年比増大率が会場に図示されてある。それを紹介しておこう。

工業総生産額 12.9%、重工業 18.9%、軽工業 5.6%、紡織工業 8.8%

また同じく主要工業製品生産高の増大率をみるとつぎのとおりである。

鉄鋼 19.2%、発電量 25.3%、硫酸 59.3%、金属切削機械 17.8%、化学肥料 132.7%、タイヤ・チューブ 39.3%、自転車 13.4%、ミシン 12.9%、綿糸 29.4%、綿布 43.9%

##### 2. 上海七一農業機械修理組立工場

工業展覧会で豊収型トラクターを熱心に見ていたせいも、さっそくこの出品工場見学の手配をしてくれた。この工場は、上海から西南に向かって、閔行工業地区へ通じる滬閔路を30分ほどとぼしたところにある。非番の労働者であろうか、手榴弾投てきなど民兵訓練をしているのが望まれた。ここは外国の見学者もほとんどこないらしくて、素朴な労働者があたたかく歓迎してくれた。

この工場が設立されたのは1952年、はじめは労働者がわずか17人という小規模なもので、農機具や外国製トラクターの修理を専門に行なっていたが、1958年のあの生産大躍進を契機にして拡張されたという。職員労働者も540人に増加している（女子は18%）。工場の組織をみると、事務関係は、辦公室、行政、財務、材料供給、動力、食堂、保健、技術の各科があり、現場は、(1)農機具修理工場（労働者60人）、(2)トラクター組立工場（200人）、(3)鋳物工場（45人）、(4)鍛圧工場（55人）に分かれている。このように農機具の修理と豊収型トラクターの生産を主としており、大躍進、農業生産支援の過程で、小規模企業から成長した典型的な農業機械工場とみられる。

なおこの豊収型トラクターは、1961年10月に試作1号ができ、まだ量産体制にはいっていない。65年の第1四半期は30台生産の予定という。土地区分がせまく、土壌がやわらかい江南地方の耕作に適するよう、農民の意見を聞き、改良をかさねているらしい。この地方に従来輸

## 現地報告

入されていたソ連製トラクターより軽く、チェコ製よりは重く、能率がよくて油の消費量が少ない、というのがねらいようだ。別にモデルや中央の技術者の援助もなく、これまでのトラクター修理の経験を基礎にして、この労働者が自力でつくりあげたのだと強調していた。

ここの労働者の平均賃金は55元、最高は技術者110元、最低は見習工39元である。就業時間は7時30分から4時30分まで、昼休み1時間、完全な8時間労働で、技術部門と労働組合とで決定した操作規則を遵守しているので事故はまったくないとのことである。工場の壁には「為農業生産服務、做到質量好產量高成本低」（農業生産に奉仕するため、品質を良くし、生産を高め、コストを下げよう）と大きくかかれてあった。

### 3. 信誼化学製薬工場

この工場は1925年の創立だから40年の歴史を有する。解放前は上海で最大（つまり中国第1）の製薬会社であった。ここでは20年来の経営者である元資本家と、主として資本主義企業の社会主義改造の問題について対談した。この人は上海市商工連合会の常任委員であり、また上海市および全国の人民代表（議員）でもある。

この会社が公私合営化するにいたった経済的背景をなすものは、戦後、アメリカ資本の圧迫と破滅的なインフレーション（通貨発行額指数1948年8月31日=1として、49年4月=9487.57）によって経営がなりたたなかったことにあるようだ。たとえば1946年に上海だけで1500万米ドルの薬品を輸入したが、これは同市の年間生産能力の5倍に相当したという。このためやむなく生産を停止し、もっぱらアメリカ薬品の販売をすることにしたが、それでもアメリカ商社およびこれと結託する官僚資本家のために手ひどい打撃をうけた。あるとき、11万米ドル、20万本のペニシリンをニューヨークに注文したところ、契約期になっても現品は到着せず、そのうち揚子公司や孚中公司といった官僚資本家の会社から同じ製品が大量に発売されたため、あとで二東三文でたき売りしなければならなかったという。このようにして当時、上海の製薬工場の半数が破産したのである。解放後の1950年にもまだアメリカの経済封鎖があって生産は困難だったが、人民政府の資金・技術の援助があり、しだいに生産を回復した。生産額増加の推移をみると、1949年=100、54年=650、57年=1250、64年=8600となっている。種類も以前は栄養剤程度であったが、現在は原料をほとんど自給し、抗生物質、スルファマイシン、ホルモン、イナ、一般薬品の5部門に分けて、140種の薬品を生産し

ている。

この工場は1954年7月に公私合営化した。この元資本家にとって、中国が過渡期の総路線（農業、手工業、資本主義工商業を社会主義改造する）の政策をつうじて工業国となることに異論はなかったが、やはり個人としては、合営化前の生活水準を維持できるか、ひきつづいて工場長の地位にとどまれるか、また政府側からくる代表と協調して経営できるかどうか、心配はつきなかつたという。当時の全資産評価は800万元、このうち国家投資は60万元であった。現在、同氏は第1工場長であり、政府代表は第2工場長、ほかに副工場長として政府代表2名、旧会社代表2名がいる。同氏の月給は80元、ほかにこの工場の持株4万元に対して毎年5%の「定息」（固定利子）2000元をうけるとる。

この固定利子は、1956年に資本家に対する生産手段の買いもどし政策として決定され、7年間にわたって支払われる予定であったが、62年になってさらに3年間の延長がみとめられたものである。1965年はその最終年にあたる。これがひきつづいて支払われるかどうか、いまのところ不明だが、決定にあたって政府は必ず商工連合会に意見を求めるだろう。それは主として、(1)資本家の生活に困難は生じないか、(2)打切りをうけいれる思想的準備ができていないか、によって判定されるだろうという。最後に、この工場には秘書、財務、生産技術、計画、購買販売の各科があり、食堂、托児所、医務室、図書館が完備しており、別に療養所もある。工場の資金で2階建の労働者アパートを、1954年に130戸、58年に140戸建設した。家賃は5元。女子労働者の出産休暇は56日という。

### 4. 曹楊新村

これは中国の代表的な労働者住宅街の一つらしく、わが国でも『世界』のグラビヤなどで紹介されたことがある。建設されたのは1951年、戸数約1万3000、住民数約6万8000というから、日本住宅公団の団地と比べてだいぶ規模が大きい。現在、このような新村が上海に70以上あるという。この曹楊新村には、上海市普陀区辦事処の指導をうける街道（町内）委員会があって、住民の投書を処理したり、福利・文教・衛生事業を行なっている。この委員という婦人から、いろいろ話を聞き、托児所の一つにも案内してもらった。中国の子供たちは丸々とふとって、活発に遊んでいた。

住宅は4階建のアパート式で、水道、電気、ガスが設備されており、だいたい5坪ほどの部屋1間、これにか



なり広い台所と便所がついている。住民のほとんどは紡織工場労働者らしい。ちょうど非番の労働者を訪ねてみた。申大綿布工場に働く李宝東という43歳のやすり工で、家族は妻と子供の3人、賃金は一月85元というから平均水準より上である。毎月のおもな家計支出は食費45元、水道・電気代2元、ガス代1.70元、家賃3.10元、このほかの支出として交通・通信・娯楽費などが考えられるが、かなり余裕があるといえる。婦人委員の話によれば、1964年末に総戸数の80%が預金しており、その総額は230万円に達したという。ただ「衣」の面では年に2回綿布10尺の配給があるのみで、最近出まわりはじめた化学繊維をのぞいて自由販売のものは割合高いのが問題であると思う。上海は他の都市と比べて服装はいきなほうだが、まだ質素な綿服が多い。しかしこの労働者が1952年に前の掘立小屋から引越してきたときは、家財道具といえは小さな木箱1個であったのに、いまでは置時計、ミシン、ラジオ、それに自転車もあるとうれしそうに語っていた。解放前どんなにみじめな生活をしていたか子供たちに伝えるため、かつて使用した板1枚のベッドを記念に保存してあるのだとわざわざ物置から取りだしてみせてくれた。

ところでこの労働者アパートの入居はどのように決められるのだろうか。上海市人民委員会が各工場に戸数の割当てをし、各工場では労働組合が、小組別にだれがもっとも住宅事情が困難であるか大衆的な討議をさせて決定するのだという。なおこの新村には托児所12、幼稚園8、小学校9、中学校6、病院、診療所、クラブ、映画館、デパート(支店8)、野菜市場8、銀行、郵便局、公園などがある。

## V 人民公社を見る

### 1. 北京四季青人民公社

この公社は、北京を訪れる日本人の多くが参観している、これまでもわが国にたびたび紹介されている。中国でも成功している人民公社なのだろう。北京の西の郊外にあって、北京市民に野菜を供給するうえで大きな役割をはたしている。総戸数8067、総人口3万6000、労働力(満16歳以上1労働力、満50歳以上半労働力として計算)1万4400、耕地面積は約2670ヘクタール、このうち2分の1が菜園、8分の1が果樹園で、あとは、米、コーリヤン、小麦、大豆の生産が行なわれている。

この公社が成立したのは1958年8月30日で、11の高級合作社が合併された。公社成立の主要な原因は、社長み

ずからの説明によると、やはり水利問題にあるようだ。1956、57年ごろ、地下水の不足している高級合作社が、しばしば単独で水路をつくり永定河から水を引こうとしたが、資金と労働力の不足で失敗に終わった。たとえば1957年に玉泉山高級合作社が6キロにおよぶ水路建設(上幅4メートル)の計画をたてたが、この水路は三つの郷と四つの合作社を貫流することになるので、たびたび会議をもって他社との調整をはかったけれども、ついに利害の一致をみなかったという。いまこの公社に包括される地域にはかつて七つの郷政府があったから、行政面での障害もあったろう。このような高級合作社、郷政府の限界、それから生ずる生産の障壁を打破するために公社が結成されたのである。

そこで公社化のあと第1にとりくんだのは水利問題である。その方針は、地下水の不足する地帯は灌漑水路をつくり、地下水の豊富な地帯には電動ポンプで汲上げ灌漑することであった。こうして1959年末から60年にかけて、各生産大隊(旧高級合作社)から2500人が延べ100日動員され、第1期工事として幹線水路6キロ、7本の支線水路30キロを完成した。電動ポンプについては、1957年にわずか11台であったのに、65年には560台を所有するにいたっている。揚水ステーションは7カ所、電動ポンプを装備する井戸は385あって、すでに灌漑面積は耕地面積の90%に達しているという。

水利問題の基本的解決によって、野菜と果樹の栽培を飛躍的に発展させることができた。たとえば、野菜栽培地は1957年の1万0600畝(15畝=1ヘクタール)から現在の2万1000畝に、果樹園はやはり1957年の850畝から現在の5000畝に拡大した。したがってこれを生産高についてみれば、野菜は57年の5600万斤から64年は2億3000万斤に、果物は57年のゼロから64年は480万斤に増大した。食糧生産については総量としてはあまり増大しておらず、単位面積(1畝)当たり収量が57年の320斤から64年の440斤に高まっている。このようにして公社の総収入も、57年の750万元から64年には1330万元とおよそ80%も増加している。

つぎに公社の組織概況をみよう。いうまでもなく3級にわかれ、公社の下に生産大隊は12、生産隊は124ある。この区分は生産活動と居住の便宜によって決定される。だいたい市街に近い大隊ほど規模が小さく300ないし500戸、大きな大隊は1200戸ほどという。公社管理委員会にはつぎの部門がある。

生産辦公室(農業生産の管理指導)、財務部(会計)、



## 現地報告

行政辦公室(民事・結婚登記, 調停など), 畜牧辦公室(牧畜業の管理指導), 武装部(民兵)

公社管理委員会の委員は17名, これには主任(社長)1, 副主任3が含まれる。生産大隊には大隊管理委員会(大隊長1, 副大隊長1), 生産隊には隊委員会(隊長1, 副隊長1)があり, また各級にそれぞれ監査委員会があるが, これらの委員はつぎのように選挙される。まず基層の生産隊では, 毎年1回労働に参加する全社員で構成される社員大会で, 隊の管理委員, 監査委員, 社員代表を選ぶ。大隊ではやはり毎年1回, 生産隊で選ばれた社員代表で構成される社員代表大会で, 大隊の管理委員, 監査委員, 社員代表を選ぶ。しかし公社の委員は, 2年に1回全社員の直接選挙によって選ぶという。

この公社は, トラクター19標準台(15馬力換算), ハンド・トラクター10台を有するほか, 野菜出荷と肥料運搬用のトラック20台がある。また公社級には農機具修理組立工場1(労働者50人余), 大隊級には同じく農機具修理工場3, れんが工場2(同200人), 白土工場1(同70人), 園芸用鉢製造工場2, 家屋等建設隊3(同300人)がある。このように野菜と果物の栽培, 食糧生産のほか, 牧畜業, 各種副業もさかに行なわれている。例をあげると, ここで生産される野菜の種類は約80種, キュウリの栽培などは専門の生産大隊が組織されていて, この温室が実に1700室もある。このキュウリ生産大隊長は貧農出身の労働模範で品種改良の名人とか, みごとなキュウリをそのまま生で食べてみよとすすめてくれた。牧畜業は豚(1万6000頭), アヒル, 乳牛などを主とする。副業としては建築用のれんが, 野菜栽培用の鉢を生産する。中小型農機具の修理と製造は, 公社内の工場ですべてに自給している。

ここでは生産手段の所有および経済計算の基本単位は, 生産隊ではなく生産大隊である。トラクター, トラック, それに土地も公社所有という。動力灌漑ポンプ, 大車などは大隊所有であり, 小型農具は大隊級で購入して生産隊に使用させる。生産計画は大隊で決定され, 生産隊はこれを実行する。分配も大隊を単位として行なわれる。これで見ると, 公社への移行に当たって, 国営農場にしようという意見もあったというほどだから, ここはもっとも成功した先進的な人民公社といえるだろう。1964年の総収入は先にみたとおり1330万元であり, これの配分はつぎのような比率でなされた。

公共蓄積	14%
公積金(再生産用蓄積)	13%

公益金(福利費)	1%
生産管理費(生産原価)	40%
農業税	3.6%
社員分配	40%

この数字によると1労働力当たりの平均年間収入は約380元となる。生産管理費がこのように高いのは, 副業生産費支出が比較的多かったからで, 農業生産費の占める比率は35%だったという。農業税は, 1955年に総収入の7~8%と確定されて以来総額は不変で, 公社収入の増大とともに比率は低下している。60~61年ごろ調整するという話もあったがそのままのまである。

なお供銷合作社(購買販売協同組合)と信用合作社はいずれも公社とは独立の採算単位であり, 業務上中央の指導をうけると同時に, 公社からも各種の指導と援助をうける。公社員はほとんど全部両合作社の社員であるという。

### 2. 上海塘湾人民公社

上海の西の郊外, 上海県にある食糧生産を主とする人民公社である。およその規模をみると, 総戸数5697, 総人口2万0170, 労働力1万0386, 耕地面積は1790ヘクタールである。小麦, 米の生産を主とし(70%), ほかに綿花(27%), 野菜・菜種(2~3%)も栽培している。

公社化は, 1958年8月29日に, 14の高級合作社が合併して行なわれた。辦公室書記の説明では, まず土地改革によって封建的土地制度が消滅され, 農民の生産意欲はきわめて向上した。この高まりを基礎に農業の集団化が行なわれ, 農民のすべては組織の優越性を認識した。しかし高級合作社でもまだ矛盾がある。とくに水利灌漑工事は合作社だけでは解決できないので, 農民の中から大社, もしくは連社を組織せよという意見がだされた。毛主席の人民公社組織の呼びかけは, まさにこのような時期になされたのだ, という。

公社の組織概況は, 3級にわかれて公社の下に生産大隊は12, 生産隊は128ある。そして公社管理委員会にはつぎの部門がある。

辦公室, 民政, 農業, 数目(財政), 水産, 機電, 文教衛生, 民兵, 婦女

管理委員は12名, このうち3名は主任で, 社長1, 副社長2をかねる。各級の管理委員および監査委員の選出は四季青公社とほぼ同じである。ここで興味あるのは, 各級の管理委員, 監査委員, 社員代表は, すべて下層中農と貧農で占められていることである。また公社級の加工工場(主として木工)1, 農機具工場1があり(労働

者は「亦工亦農」つまり農繁期には農作業をする), おもな文教・衛生施設として, 小学校22, 初級中学1, 農業中学1, 病院1 (医師13名) をもち, 各生産隊には必ず衛生保健員が配置されている。

トラクターは, 豊収型3台, 紅旗型 (27馬力) 1台, チェコ製 (42馬力) 2台, 計6台を所有していて, 機械耕作面積は45%に達する。解放前はほとんど役牛によって耕作していた。また大型電力灌漑ステーション21, 小型移動電力灌漑ステーション41があって, これらによる灌漑面積は98%に及ぶ。以前は水車しかなく, 灌漑面積は4分の1であった。この灌漑排水能力によって, 60余日も雨が降らなかつた1960~61年の早ばつや耕地の40%が冠水した1963年の台風災害が克服された。以上のような農業の機械化と水利化および農民の生産意欲向上によって, 生産性はつぎのように向上している。

年次	晩 稻 (1ha当たりkg)	綿 花 (1ha当たりkg)	豚 (総数頭)
1950	3,100	570	1,900
1957	4,170	1,238	5,500
1963	5,250	2,025	11,870
1964	5,468	2,310	12,000

このような生産増大を反映して社員の生活水準も高まっている。たとえば標準的な1労働力当たりの年間収入は, 1950年=89元, 57年=210元, 63年=330元, 64年=380元と増加している。また家庭副業として豚, ニワトリ, アヒルの飼育などが行なわれており, この収入が1964年には各戸平均80元に達したという。なお自留地には主として自家消費の野菜が自由に栽培される。この所有面積は各生産隊によって異なる。つまり生産隊規模の耕地面積の大小, 社員数の多寡によって一様でないが, 平均1人 (年齢に関係ない) 7~8厘 (10厘=1分, 10分=1畝) ということである。

生産手段の所有制についてみれば, つぎのとおり基本単位は生産隊である。

生産隊所有 土地, 役畜, 小型農具 (すき, くわ, 噴霧器, 小型移動電力灌漑設備)

生産大隊所有 牧畜場, 中型農機具, 副業用機械, 電力灌漑設備, 農機具修理工場

公社所有 トラクター, 農機具工場, 加工工場

なお1958年の公社化後, いわゆる整社運動の過程で規模と組織上の変化はほとんどなかつたとのことであり, また土地, 役畜, 小型農具などの基本的生産手段は, 高級合作社当時から一貫して初級合作社 (いまの生産隊) 所有であったという。

つぎに総収入の配分をみると, 1964年には, 公積金8%, 生産管理費25%, 農業税7%, 社員分配60%の比率でなされた。

訪問の最後に金夢先という貧農の農家をたずねた。かれの所属する塘西生産隊は, 戸数40, 人口230, 労働力100である。土地改革当時は4人家族で1.5畝の農地を所有していたが, 新たに3畝の土地分配をうけた。現在かれは上海の荷役労働者として働いており, もっぱら妻が農業生産に従事している。祖父, 夫婦, 子供5人のいわゆる「労働力少, 小人多」の家族構成だ。64年には生産隊から306元の分配をうけた。自留地は8分 (0.8畝) で, 自家消費の野菜, 飼料用の小麦を栽培しているほか, 豚3頭, ニワトリ3羽を飼育している。北京の人民公社でも同様だったが, 貧農といっても家庭内は清潔で, たいいていは毛沢東の肖像写真がかざられ, 置時計やときによるとラジオもおかれている。

(調査研究部東アジア調査室)